

余市町でおこったこんな話

余市町でおこったこんな話 その147

余市町の埋もれた歴史等を紹介し、改めて余市町を再認識するコーナーです。

ブラジル移民

余市町の歴史年表の大正8（1918）年のページに、「余市からも新天地を求めてブラジルへ移民する者が出る」と記されています。豊丘地区の『郷土史』にも、同9年に渡航した1家族3名のお名前が見えます。インフレと農産物の売り上げ不調が国内各地の農村へ暗い影を落としていた時期のことでした。

ブラジルでは、明治20年代、奴隷が解放されたために労働力が不足し、その穴を埋めるためにブラジルからヨーロッパ各国や日本、中国への移民誘致がはじまりました。しかし、日本国政府としては、悪質な移民取扱業者がいたこと、ブラジルでの過酷な労働環境から移民を保護するために、移民の送り出しは制限している状況でした。抑制的な国の政策とは裏腹に、ブラジルからの移民誘致の声を次第に大きくなり、国内の移民希望者も増えてきて、明治41（1908）年6月、はじめての移民団およそ1,000人が笠戸丸に乗って神戸港を出発、シンガポール、喜望峯を経てブラジルに到着しました。大正3（1914）年に一時、中断したものの、同年には第一次大戦によってヨーロッパからの移民が途絶えたため日本からの移民が再開されました。

豊丘地区からのブラジルへの渡航はそうした状況の中でのことでした。その後、かの地へ渡った人々から「生活の安定した耕地の広い新天地で農業をいとなむ方が、将来のためにならなくて、多くの人が昭和2（1927）年から

同4年にかけて、豊丘地区から南米に向かった人が出発、続いて夫婦単位や親子、地区にあつた神社の宮司さん一家などがまとまって渡航してゆきました。

出発の際には保証人が必要でしたが、笠島貞治町長（当時）が数人の保証人を引き受けるなどして送り出しました。豊丘からの移民は主にブラジル南東部のサンパウロ州に向かいました。北海道にいた頃よりも何倍も広いな耕地でコーヒー、陸稲、蔬菜、雑穀を栽培しました。州都サンパウロへ出て商人や工場を経営者、現地の日系企業の社員となった者など、その後は様々でした。

登町からも昭和8年に移民団に参加された人がいました。『登郷土誌』によると、その方の知る移民団はアマゾン川流域に入植したものの、多くがそこを離れ、中にはサンパウロで農産物の仲買人となった人もいます。昭和44年10月、ブラジル渡航から35年ぶりに姥名源蔵さん（当時69歳）が豊丘へ帰りされた際のお話が『郷土史』に見えます。同9年に奥さんと子ども、一家4人でサンパウロ州に移住、日本人が経営するコーヒャー園で働き始めました。うっそうとしたジャングル、マラリア病など慣れない土地で苦

の生活を送った後、隣のサンパウロ州に移り、菜園の経営者となりました。息子さんも同じ町でクワリさん温かい歓迎を受けた



《写真：車輛工場を営む成功移住者（『郷土史』）》

余市警察署からのお知らせ ～社会に広げよう被害者支援の輪～

【犯罪の被害に遭われた方への理解】

犯罪被害に遭うとどうなるのだろうか？あなたは、そんなことを考えたことがありますか？犯罪被害者の方々は、ある日突然、犯罪の被害に遭ったことで、直接的なダメージのみならず、被害後も

- 被害のトラウマによるフラッシュバック
- 被害による対人恐怖症の発症
- 生活の立て直しや医療費などの経済的負担
- 周囲の人からの心ない言動による孤立などの二次的被害

など様々な問題を抱えながら、一人で苦しんでいることが少なくありません。

このような被害者の現状を理解し、一日でも早く被害者が問題を克服できるように寄り添い、社会全体で被害者を支えていくことができる支援の輪を広げていきましょう。

【被害者等のための各種相談窓口の積極的利用】

警察では事件や事故の被害に遭われた方や家庭内暴力、ストーカー、お子さんのいじめ問題などで悩んでいる方などの相談を受け付けています。

また、事件や事故による心の傷が癒されず悩んでいる方のために、民間被害者相談窓口のカウンセラーがあなたの話をお聞きます。事件や事故でお悩みの方は、勇気を出してご相談ください。

<警察相談電話>

- 被害者相談
性犯罪被害 110 番（フリーダイヤル）
☎ 0120 - 756 - 310
- 同上（携帯電話から） ☎ 011 - 242 - 0310
- 少年相談 110 番（フリーダイヤル）
☎ 0120 - 677 - 110

- 一般相談
専用電話 ☎ # 9110

<民間被害者相談電話>

北海道被害者相談室 ☎ 011-232-8740

姥名さんはひと月ほど滞在して旧交を温め、同年11月にブラジルへ帰ってゆきました。